

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化							
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 懸念のおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果			
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
局 所 麻 酔 成 分	アミノ安息香 酸エチル	アミノ安息香 酸エチル「丸 石」(内用・ 外用)	胃粘膜の知 覚神経末端 を麻痺させ、 中枢への刺 激伝達を遮 断して疼痛、 嘔吐を鎮め る。			0.1~5% (食 欲不振、悪 心、口渇、便 秘)、0.1%未 滅(下痢、メ トヘモグロビ ン血症(小 児))	頻度不明(過 敏症)			本剤過敏症既往 歴 乳幼児(内用・坐 剤の場合)	高齢者、妊婦又は 妊婦の可能性		(内用) 口内にしびれ等 を残さないため 速やかに飲み下 す (外用) 眼には使用しな いこと[軟膏・液 剤の場合]、誤つ て吸入しないこと [散布剤の場合]	長期連続投 与回避	(内用) 1日0.6~1g、3回分服。適 宜増減。高齢者は減量 (外用) 通常、5~15%の軟膏剤、 液剤、散布剤として、また は、1個中200mg~300mg を含有する坐剤として適宜 患部に使用する	(内用) 下配疾患に伴 う疼痛・嘔吐・ 胃炎、胃潰瘍 (外用) 下配疾患にお ける鎮痛・鎮 痙・外傷、熱 傷、日焼け、皮 膚潰瘍、掻痒 症、痔疾
局 所 麻 酔 成 分	塩酸ジブカイ ン	ペルカミン注 表面麻酔に 類似のため 使用	感覚・求心神 経繊維のNa ⁺ チャンネルを遮 断すること により局所麻酔 作用を発現す る。効力、持 続性、毒性い ずれも最大級 の局所麻酔 薬であるが、 より効力を強 めるために局 所鎮痛以外の 目的にはエ ピネフリンを 添加して用い る	痙攣、痙攣等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眼 気、不安、興 奮、錯視、眩 暈、悪心・嘔 吐等)	頻度不明(過 敏症)		本剤に対し過敏症 の既往歴	本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、尋麻疹等の アレルギー反応を 起こしやすい体質。 高齢者、妊婦又は 妊婦している可能 性のある婦人。			使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 仙骨麻酔 0.05~0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人10~30mg を使用する。 伝達麻酔 (基準最高用量: 1回 40mg) 0.05~0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人3~40mgを 使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量: 1回 40mg) 0.05~0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人1~40mgを 使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜 麻酔には、1~2%液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、噴霧または塗布 する。 ・眼科領域の麻酔には、 0.05~0.1%液にエピネフ リンを添加したものを用い、 通常成人には1~5滴を点 眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、	仙骨麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔・浸潤麻 酔		

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化
局所麻酔成分	塩酸プロカイン	塩酸プロカイン注「ホエイ」 局所麻酔に類似のため使用	合成局所麻酔薬の原型であり、感覚・求心神経線維のNa ⁺ チャネルを遮断し、活動電位の伝導を抑制することにより局所麻酔作用を発現する。粘膜への浸透性が悪いので表面麻酔としては無効である。代謝産物が血管拡張作用を有し、速やかに吸収されるのでエビネフリンの添加が必要である。			握せん、痺れん等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(おむけ、不安、興奮、霧視、めまい、悪心・嘔吐、メヘモグロビン血症)	頻度不明(過敏症)		重篤な出血やショック状態(腎臓・硬膜外麻酔時：症状が悪化)、注射部位またはその周辺に炎症(腎臓・硬膜外麻酔時：効果が急激に発現)、敗血症の患者(腎臓・硬膜外麻酔時：敗血症性の髄膜炎がおこるおそれ)、メヘモグロビン血症(腎臓麻酔を除く) (症状が悪化するおそれ、本剤または安息香酸エステル(コカインを除く)系局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴)	高齢者、妊婦または妊娠している可能性のある婦人、妊娠末期の婦人						使用に際し、目的温度の水溶性注射液として使用する。 腎臓麻酔(腰臓麻酔) 5~10%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、低位麻酔には50~100mg、高位麻酔には150~200mgを使用する。 硬膜外麻酔 (基準量高用量:1回600mg)1.5~2%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、200~400mgを使用する。 伝達麻酔 1~2%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、10~400mgを使用する。 浸潤麻酔 (基準量高用量:1回1,000mg)0.25~0.5%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、1回1,000mgの範囲内で使用する。 歯科領域麻酔 2%注射液にエビネフリンを添加したものをいい、伝達麻酔、浸潤麻酔には、通常、成人には塩酸プロカインとして、10~100mgを使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 必要に応じエビネフリン(通常濃度1:10万~20万)を添加して使用する。	腎臓麻酔(腰臓麻酔)、硬膜外麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔	
	リドカイン	キシロカイン液「4%」 表面麻酔に類似のため使用	神経膜のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。表面・浸潤・伝達麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。			意識障害、痙攣(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眼瞼、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分又はプロミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴。	高齢者又は全身状態が不良、心刺激肝機能障害、重症の肝機能障害又は腎機能障害、幼児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。						過量投与で中毒症状が現れる。症状として中枢神経系(不安、興奮、意識消失、全身痙攣など)、心血管系(血圧低下、徐脈、循環虚脱など)が現れる。 眼科(点眼)用として使用しないこと。注射用として使用しない。	塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。 なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。 幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。	表面麻酔

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別(注意を要する(適応を誤るおそれ))	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
抗炎症成分	塩化リゾチーム	レフトーゼ錠 抗炎症作用、 癒瘍形成、組織修復作用、 膠粘液の分解と排出作用、 出血抑制作用					本剤の成分過敏症の既往歴、卵白アレルギー/アナフィラキシー・ショックを含む過敏症(注)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別(注意を要する(適応を誤るおそれ))	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	グリチルリチン酸	軟膏のみなので、グリチルリチン酸モノアンモニウム(グリチロン注一号)を使用	抗炎症作用	ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含む含有する製剤)		偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)					長期運用により偽アルドステロン症	グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹
抗炎症成分	酢酸ヒドロコルチゾン	コートリル錠 外用痔疾用薬なのでヒドロコルチゾンの内服で代用	抗炎症・抗アレルギー作用を示す糖質副腎皮質ホルモンである。副腎抽出ラットの肝に対する本薬の懸濁増加作用はコルチゾンの約1.5倍であり、ラット綿球肉芽腫に対する抗炎症作用はコルチゾンの約1.3倍である。 ヒドロコルチゾンの糖質副腎皮質ホルモンとしての作用は弱く、副腎抽出イヌに対する生命維持作用はデオキシコルチコステロンの約0.04倍である。	バルビツール酸誘導体・フェニトイン・リファンピシン(代謝が促進されることにより本剤の作用が減弱)、サリチル酸誘導体(これらの薬剤との併用時に本剤を減量すると血清中のサリチル酸誘導体の濃度が増加し、サリチル酸中毒)、抗凝血剤(これらの薬剤の作用を減弱)、利尿剤(カリウム保持性利尿剤を除く)(低カリウム血症)	感染症、鎌状赤血球症、糖尿病、腎不全、糖尿病、消化性潰瘍、骨粗鬆症、大動脈及び上腕骨等の骨折、急性壊死、ミオパシー、緑内障、後囊白内障、眩暈、痙攣、筋肉痛、関節痛、満月様顔貌、野牛肩、空素負平衡、脂肪肝、浮腫、血圧上昇、低カリウム性アルカローシス、中心性液性網脈絡膜症等による網膜障害、眼球突出、白血球増多、多毛、色素沈着、皮下潰	頻度不明(過敏症)	頻度不明(過敏症)	本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者、有効な抗菌剤の存在しない感染症、全身的真菌症、結核性疾患、単純疱疹性角膜炎(感染症を増悪させるおそれ)、消化性潰瘍(潰瘍を増悪させるおそれ)、精神病(精神病を増悪させるおそれ)、後囊白内障の患者(白内障を増悪)、緑内障(眼圧を上昇)、高血圧(血圧を上昇)、電解質異常(低カリウム血症等)、血栓症(血栓症を増悪させるおそれ)、最近行った内臓の手術(創傷治癒を障害させるおそれ)、急性心筋梗塞(心破裂)	水痘又は麻疹の既往のない患者においては、水痘又は麻疹への感染を複力防ぐよう常に十分な配慮と観察を行うこと。	高齢者への長期投与・感染症の誘発、ときに離脱症状があること、徐々に減量するなど慎重に行なうこと。	高齢者への長期投与・感染症の誘発、ときに離脱症状があること、徐々に減量するなど慎重に行なうこと。 小児への長期投与・頭蓋内圧亢進症	通常、成人にはヒドロコルチゾンとして1日10~120mgを1~4回に分割して経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	1慢性副腎皮質機能不全(原発性、続発性、下垂体性、医原性)、急性副腎皮質機能不全(副腎クラーゼ)、副腎性難症候群、亜急性甲状腺炎、甲状腺疾患に伴う悪性眼球突出症、ACTH単独欠損症 2慢性関節リウマチ、若年性関節リウマチ(スチル病を含む)、リウマチ熱(リウマチ性心炎を含む) 3エリテマトーデス(全身性及び慢性円板状)、全身性血管炎(大動脈炎症候群、結節性動脈周囲	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 換るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 換るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量の上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ					
							血、紫斑、線 条、そう痒、 発汗異常、顔 面紅斑、創傷 治癒障害、皮 膚菲薄化・脆 弱化、脂肪織 炎、発熱、疲 労感、ステロ イド腎症、体 重増加、精子 数及びその 運動性の増 減)、神経障 害・抗体反応 の欠如(副腎 皮質ホルモン 剤を投与中 の患者にフ クチン(種痘 等)を接種し た場合)、小 児、発育抑 制、頭蓋内圧 亢進状態(長 期投与)、高 齢者、感染症 撲発、糖尿 病、青組眼 症、高血圧 症、後のう白 内障、緑内障													炎、多発性動 脈炎、ウェゲナ 肉芽腫症を含 む)、多発性筋 炎(皮膚筋 炎)、強皮症 4.ネフローゼ及 びネフローゼ 症候群 5.気管支喘 息、薬剤その 他の化学物質 によるアレルギー ・中毒(薬 疹、中毒疹を 含む)、血毒病 6.重症感染症 (化学療法と併 用する) 7.溶血性貧血 (免疫性又は 免疫性機序の 疑われるも の)、白血病 (急性白血病、 慢性骨髄性白 血病の急性転 化、慢性リンパ 性白血病)(皮 膚白血病を含 む)、顆粒球減 少症(本態性、 続発性)、紫斑 病(血小板減 少性及び血小 板非減少性)、 再生不良性貧 血 8.眼毒性 炎、潰瘍性大

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重要な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化						
						薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの							使用量に上り過ぎるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
																						9 重症消耗性疾患の全身状態の改善(終末期、スブルーを含む) 10 慢性肝炎(活動型、急性再燃型、胆汁うっ滞型)(但し、一般的治療に反応せず肝機能が著しい異常が持続する難治性のものに限る)、肝硬変(活動型、難治性腹水を伴うもの、胆汁うっ滞を伴うもの) 11 サルコイドーシス(但し、両側肺門リンパ節腫脹のみの場合を除く) 12 肺結核(粟粒結核、粟症結核に限る)(抗結核剤と併用する)、結核性胸膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性腹膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性心臓炎(抗結核剤と併用する)

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		適応薬品	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応薬品	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの											
																		13.脳脊髄炎 (脳炎、脊髄炎 を含む)(但し、 一次性脳炎の 場合は頭蓋内 圧亢進症状が みられ、かつ 他剤で効果が 不十分なとき に短期間用い ること)、末梢 神経炎(ギラン バレー症候群 を含む)、筋強 直症、多発性 硬化症(視束 脊髄炎を含 む)、小舞踏 病、顔面神経 麻痺、脊髄脚 網膜炎 14.悪性リンパ 腫(リンパ肉腫 症、細網肉腫 症、ホジキン 病、皮膚細網 症、嚕状癌肉 症)及び類似 疾患(近縁疾 患)、好酸性肉 芽腫、乳癌の 再発転移 15.特異性低血 糖症 16.原因不明の 発熱 17.副腎摘除、 副腎皮質機能 不全患者に対 する外科的侵 襲 18.蛇毒・昆虫 毒(重症の虫さ されを含む) 19.卵管整形術 後の癒着防止 20.★湿疹・皮 膚炎群(急性 湿疹、亜急性 湿疹、慢性湿 疹、接触皮膚 炎、貨幣状湿 疹、自家感作 性皮膚炎、アト ピー皮膚炎、 乳・幼・小児湿 疹 21.内眼・視神経 22.急性・慢性中 23.難治性口内 ★印の附されて

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌・他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ				薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)				
抗炎症成分	酢酸プレドニゾン 20mg(酢酸プレドニゾンがないためリン酸プレドニゾンで代用)	ラットの漿膜炎酢酸注入潰瘍性大腸炎モデルに対し、リン酸プレドニゾン0.3mg/kg、0.1mg/kgの注射剤投与にて有意な潰瘍面の縮小効果が認められた	バルビツール酸誘導体(フェノバルビタール)・フェニトイン・リファンピシン(本剤の作用が減弱)、サリチル酸誘導体(併用時に本剤を減量すると、血清中のサリチル酸誘導体の濃度が増加し、サリチル酸中毒)、抗凝血剤(抗凝血剤の作用を減弱)、経口糖尿病用剤・インスリン製剤(これらの薬剤の作用を減弱)、利尿剤(カリウム保持性利尿剤を除く)(併用により、低カリウム血症)、活性型ビタミンD3製剤(高カルシウム血症、尿路結石があらわれる)、シクロスポリン(副腎皮質ホルモン剤の大量投与により、併用したシクロスポリンの血中濃度が上昇)、マクロライド系抗生物質(副腎皮質ホルモン剤で、作用が増強)	誘発感染症、感染症の増悪、線状性副腎皮質機能不全、糖尿病、消化管潰瘍、消化管穿孔、消化管出血、腸炎、精神変調、うつ状態、痙攣、骨粗鬆症、大腸骨及び上腕骨等の骨折、無菌性膿瘍、死、ミオパシー、緑内障、中心性漿液性網脈絡膜病、多発性後極部網膜色素上皮症、血栓症、心筋梗塞、脳梗塞、動脈瘤(頻度不明)	アナフィラキシー様反応、喘息発作(頻度不明)	頻度不明(月経異常、下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲不振、多幸症、不眠、頭痛、めまい、筋肉痛、関節痛、高月経顔貌、野牛肩、窒素負平衡、脂肪肝、浮腫、血圧上昇、低カリウム性アルカローシス、網膜剥離、眼球突出、白血球増多、さ瘤、多毛、脱毛、色素沈着、皮下出血、紫斑、線条、そう痒、発汗異常、顔面紅斑、創傷治癒遅延、皮膚菲薄化、脂肪織炎、発熱、疲労感、ステロイド腎症、体重増加、精子数及びその運動性の増減、尿路結石)、高齢者：長期投与時に感染症の誘発、糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症、後のう白内障、緑内障、小児：免疫抑制、頭蓋内圧亢進症状や高血圧性脳症、神経障害・抗体反応の欠如(副腎皮質ホルモン剤を投与中の患者にワクチン(種痘等)を接種した場合)。		禁忌：本剤の成分に対し過敏症の既往歴 原則禁忌 1.有効な抗菌剤の存在しない感染症(感染症が増悪するおそれ) 2.消化性潰瘍(消化性潰瘍が増悪するおそれ) 3.精神病(精神病が増悪するおそれ) 4.結核性疾患(結核性疾患が増悪するおそれ) 5.単純疱疹性角膜炎(単純疱疹性角膜炎が増悪するおそれ) 6.後囊白内障(後囊白内障が増悪するおそれ) 7.緑内障(緑内障が増悪するおそれ) 8.高血圧症(高血圧症が増悪するおそれ) 9.電解質異常(電解質異常が増悪するおそれ) 10.血栓症(血栓症が増悪するおそれ) 11.最近行った内臓の手術(創傷治癒を遅延するおそれ) 12.急性心筋梗塞(心破裂)	感染症、糖尿病、骨粗鬆症、腎不全、甲状腺機能低下、肝硬変、脂肪肝、脂肪蓄積症、重症筋無力症、高齢者、薬物、食物、添加物等に過敏な喘息患者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦	水痘又は麻疹の既往の低い患者においては、水痘又は麻疹への感染を強力防ぐよう常に十分な配慮と観察を行うこと。	運用後、投与を急に中止した場合ときに発熱、頭痛、食欲不振、筋力脱力、筋肉痛、関節痛、ショック等の離脱症状。	高齢者に長期投与した場合、感染症の誘発、糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症、後囊白内障、緑内障等の副作用があらわれやすい。	通常、成人は、1回量リン酸プレドニゾンナトリウムとして22mg(リン酸プレドニゾンとして20mg)を注射剤投与(直腸内注入)する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	潰瘍性大腸炎、限局性腸炎			

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果	
						適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)		症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量に上乗せがあるもの				過量使用・誤使用のおそれ
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量に上乗せがあるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
鎮痛成分	塩酸ジフェンヒドラミン	ベナ錠	抗ヒスタミン作用: H1受容体に対しヒスタミンと競合的に拮抗することにより作用をあらわす。 ヒスタミン遊離抑制作用:	頻度不明(口渇、悪心・嘔吐、下痢、めまい、倦怠感、神経過敏、頭痛、眼痛) 自動車の運転等危険を伴う機械の操作	頻度不明(過敏症)	鎮内腫(悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(悪化)	授乳中の婦人、未熟児、新生児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、高齢者							塩酸ジフェンヒドラミンとして、通常成人1回30~50mg(3~5錠)を1日2~3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	痔瘻、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹、皮膚炎)、結核熱、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、急性鼻炎、春季カタルに伴うそう痒
鎮痒成分	クロタミトン	オイラックス	本剤は抗ヒスタミン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚のうちそう痒感を抑制するが、他の皮膚感覚には影響を与えないことから、抗ヒスタミン剤、局所麻酔剤とは作用機序を異にすると考えられる。一般には、皮膚に軽いしゃく熱感を与え、温覚に対するこの刺激が競合的にそう痒感を消去させるといわれている。	0.1~5%未満(熱感・しゃく熱感、刺激症状(ピリピリ感、ひりひり感等)、発赤、発赤増強・紅斑増悪、分泌物増加、浸潤傾向)	5%以上(過敏症)	本剤に対して過敏症の既往歴	・高齢者・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人への大量又は長期にわたる広範囲の使用、乳幼児・小児に対する広範囲の使用	炎症症状が強い浸出性の皮膚炎;適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。		・腫あるいは腫周囲及び粘膜には使用しない。 ・塗布直後、軽い熱感を生じることがあるが、通常短時間のうちに消失する。	・高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、大量・長期にわたる広範囲の使用は避ける			通常、症状により適量を1日数回患部に塗布又は塗擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人:大量かつ広範囲の使用は避ける。	湿疹、尋麻疹、神経皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量		J 効能効果		
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果		
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの												
	d-マレイン酸 クロルフェニ ラミン	ボララミン錠 2mg	抗ヒスタミン 作用	中枢神経抑制剤・アルコー ル・MAO阻害剤・抗コリン作 用を有する薬剤(相互に作用 を増強)、ドロキドパ、ノル エピネフリン(血圧の異常上 昇)	痙攣・錯乱・ 再生不良性 貧血・無顆粒 球症(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	5%以上又は 頻度不明(鎮 静、神経過 敏、頭痛、焦 燥感、複視、 眩暈、不眠、 めまい、耳 鳴、前庭障 害、多幸症、 情緒不安、ヒ ステリー、振 戦、神経炎、 協調異常、感 覚異常、霧 視、口渇、胸 やけ、食欲不 振、悪心、嘔 吐、腹痛、便 秘、下痢、頻 尿、排尿困 難、尿閉等低 血圧、心搏亢 進、頻脈、期 外収縮、鼻及 び気道の乾 燥、気管分泌 液の粘性化、 喘鳴、鼻閉、 溶血性貧血、 肝機能障害 (AST(GOT)・ ALT(GPT)・ AI-Pの上昇 等)、悪寒、 発汗異常、疲 労感、胸痛、 月経異常、 0.1%未満 (血小板減 少)、眠気を 催すことが あるので自動 車の運転等 危険を伴う機 械の操作	5%以上又は 頻度不明(過 敏症)		本剤の成分又は 類似化合物に対し 過敏症の既往歴、 線内腫(線内腫の 増悪)、前立腺肥 大等下部尿路に 閉塞性疾患(症状 の増悪)、低出生 体重児・新生児(痙 攣等の重篤な反応 があらわれるお それ)	眼内圧亢進、甲状 腺機能亢進症、狭 窄性消化性潰瘍、 幽門十二指腸通過 障害、循環器系疾 患、高血圧症、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人							d-マレイン酸クロルフェニ ラミンとして、通常、成人に は1回2mgを1日1~4回経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。		じん麻疹、血 管運動性浮 腫、結核熱、皮 膚疾患に伴う そう痒(湿疹・ 皮膚炎、皮膚 そう痒症、薬 疹)、アレルギー 性鼻炎、 血管運動性鼻 炎、感冒等上 気道炎に伴う しゃみ・鼻汁
止 血 成 分	塩酸テトラヒ ドロソロン	ABCスプ レー 点鼻薬、塩 酸塩がなく、 硝酸塩	直接局所粘 膜に適用す れば粘膜の 充血、腫脹を 除去する。 血圧上昇作 用はエビネフ リンと類似で あり、作用の 発現はエビネ フリンより遅 い。	モノアミン酸化 酵素阻害剤 (急激な血圧 上昇)		頻度不明(鎮 静、頭痛、め まい、振戦、 不眠症、脱力 感、血圧上 昇、心搏亢 進、不整脈、 熱感、刺激 痛、乾燥感、 反応性充血、 鼻漏、長期使 用で反応性の 低下等)	頻度不明(過 敏症)		本剤に対し過敏 症の既往歴 ・2歳未満の幼児・ 乳児(全身症状) ・モノアミン酸化酵 素阻害剤を投与中 (急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血 圧症、甲状腺機能 亢進症、糖尿病、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、小児	適用又は頻回使 用により反応性の 低下や局所粘 膜の二次充 血を起すこと であるので、 急性充血期 に陥って使用 するか又は 適切な休業 期間を 使用するこ と。		適用又は頻回使 用により反応性の 低下や局所粘 膜の二次充 血を起すこと である。 小児において、 過量投与により、 発汗、徐脈、昏 睡等の全身症状 があらわれやす い。 眼科用として使 用しないこと。			本剤は原則として6歳以 上の子供及び成人に用い る。 通常、成人3~5時間毎に2 ~3回鼻腔内に噴霧する か、又は2~4滴を鼻腔内 に点鼻する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。		上気道の諸疾 患の充血・うっ 血		

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 産用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の増悪 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
止血成分	塩酸ナファリン 0.05%プリピ ナ液「チ バ」、塩酸塩 なく硝酸塩	血管平滑筋 のα-アドレ ナリン受容体 に直接作用し て血管を収縮 させる。 アドレナリン より強い末梢 血管収縮作用 を有し、作用 持続時間も 長い(ウサギ 耳動血管)。	MAO阻害薬 (急激な血圧 上昇)				本剤の成分に対し 過敏症の既往歴 2歳未満の乳・幼 児(ショック) MAO阻害剤の投 与を受けている (急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血 圧症、甲状腺機能 亢進症、糖尿病、 交感神経作用薬に よる不眠、めまい などの既往、妊婦又 は妊娠している可 能性のある婦人、 小児	連用又は頻 回使用により 反応性の低 下や局所粘 膜の二次充 血を起こすこ とあるため、 急性充血期 に際して使用 するか又は 適切な休薬 期間をおい て使用するこ と。	眼科用として使 用しないこと。 過量投与により、 主な全身作用と して、血圧上昇と 二次作用として 臓器虚血がみら れる。 幼・小児では過 量投与により、顕 著な鎮静があら われ、発汗、徐 脈、昏睡等の全 身症状があらわ れやすい。連用・ 頻回投与により 顆粒球減少、反 応性の低下、局 所粘膜の二次充 血を起こすこと がある。	連用・頻回投 与により顆粒 球減少、反応 性の低下、局 所粘膜の二次 充血を起こす ことがある。		通常、成人鼻腔内には、1 回2～4滴を1日数回、咽 頭・喉頭には1回1～2mL を1日数回塗布又は噴霧 する。なお、年齢、症状に より適宜増減する。 局所麻酔剤への添加に は、局所麻酔剤1mLあた り0.05%液2～4滴の割合 で添加する。	上記の諸疾 患の充血・うっ 血 上気道粘膜炎 の表面麻酔時に おける局所麻 酔剤の効力持 続時間の延長 で添加する。	
d-塩酸メチ ルエフェド リン	d-塩酸メ チルエフェ ドリン散	アドレナリン 作用性の気 管支拡張作 用と中枢性鎮 咳作用を示 す。	カテコールア ミン製剤(不整 脈、場合によ っては心停止 を起こす)	MAO阻害剤・甲状腺製剤(作 用が増強)、キサンテン誘導 体・ステロイド剤・利尿剤(血 清カリウム値が低下)	β2刺激剤に より重篤な血 清カリウム値 の低下		カテコールアミン 製剤を投与中(不整 脈、場合によっ ては心停止を起 こすおそれ)	甲状腺機能亢進 症、高血圧症、心 疾患、糖尿病、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人、授乳 中の婦人、小児 等、重症喘息(血清 カリウム低下)		過度に使用を続 けた場合、不整 脈、場合によっ ては心停止を起 こすおそれがある			d-塩酸メチルエフェドリン として、通常成人1回25～ 50mgを1日3回経口投与す る。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に高齢 者では生理機能が低下し ているので減量するなど注 意すること。	下記疾患に伴 う咳嗽 気管支喘息、 感冒、急性気 管支炎、慢性 気管支炎、肺 結核、上気道 炎(咽喉頭炎、 鼻カタル) 尋麻疹、湿疹	
酸化亜鉛	酸化亜鉛 「エビス」	皮膚のたん 白質と結合し て被膜を形成 し、収れん、 消炎、保護並 びに緩和な防 腐作用を現 す。また、浸 出液の吸収 及び分泌抑 制により、創 面又は潰瘍 面などを乾燥 させる。					・本剤に対し過敏 症の既往歴のある 患者 ・重度または広範 面の熱傷・凍傷が 癒済している場所 (組織修復を遅延) ・患部が湿潤して いる場所(組織修 復を遅延)			眼には使用しな いこと。吸入しな い。				外用散剤(散布剤)として1 5～100%、軟膏剤・液剤 (懸濁剤・リメント剤・ ローション剤等)として2～ 60% 上記濃度に調整し、いず れも症状に応じ1日1～数 回患部に適用する。	効能・効果軽 度の皮膚病変 の収れん・消 炎・保護・緩和 な防腐

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ					
抗菌成分	イソプロピルメチルフェノール	フェノール 歯科用ではない	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。					頻度不明(過敏症)		・損傷皮膚及び粘膜「吸収され中薬症状発現」				・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕性及び吸収され、中毒症状を起すことがある。眼に入らないように注意すること。・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包装、ギプス包装、バッグに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起すおそれがある。]・膀胱を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。		長期間に使用しないこと。 ・(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。)		効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒。フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒。フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) 排泄物の消毒。フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下痢疾患の鎮痒 痔瘻(小児ストロファルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液 フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏。フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍)		

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)		使用方法(誤使用のおそれ)			
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)		使用方法(誤使用のおそれ)			用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
抗菌成分	塩酸クロルヘキシジン 5%ヒビテン液、グルコ ン酸塩を使用	抗菌作用:グ ラム陽性菌に は低濃度でも 迅速な殺菌 作用を示す。 グラム陰性菌 には比較的 低濃度で殺 菌作用を示す が、グラム陽 性菌に比べ 抗菌力に幅 がみられる。 芽胞形成菌 の芽胞には 効力を示さな い。結核菌 に対して水溶 液では静菌 作用を示し、 アルコール溶 液では迅速な 殺菌作用を 示す。真菌類 の多くに抗菌 力を示すが、 全般的に細 菌類よりも抗 菌力は弱い。 ウイルスに対 する効力は確 定していない。 作用機序は 十分には解 明されていない が、比較的 低濃度では 細菌の細胞 膜に障害を与 え、細胞質成 分の不可逆 的漏出や酵 素阻害を起 こし、比較的高 濃度では細 胞内の蛋白 質や核酸の 沈着を起す ことが報告さ れている。		ショック(0.1% 未満)	0.1%未満 (過敏症)		クロルヘキシジン 製剤に対し過敏症 の既往歴 脳、腎臓、耳(内 耳、中耳、外耳) (聴覚、神経障害) 腫、膀胱、口腔等 の粘膜面(ショック 症状) 腫 産婦人科用(腫・ 外陰部の消毒 等)、泌尿器科用 (膀胱・外性器の 消毒等)	薬物過敏症の既往 歴 喘息等のアレル ギー疾患の既往 歴、家族歴				外用にのみ使用 する 腫に入らないよう 注意する。産婦 人科用(腫・外陰 部)、泌尿器科 (膀胱・外性器) には使用しない こと。創傷部位に 使用する希釈液 は調製後減菌す る。本剤は必ず 希釈し温度に注 意して使用		①0.1~0.5%水溶液(本剤 の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30 秒以上) 汚染時:0.5%水 溶液(30秒以上)) ②0.1~0.5%水溶液(本剤 の50倍~10倍希釈)又は 0.5%エタノール溶液(本剤 の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) ③0.05%水溶液(本剤の 100倍希釈) (0.05%水溶液) ④0.1~0.5%水溶液(本剤 の50倍~10倍希釈)又は 0.5%エタノール溶液(本剤 の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10 ~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30 分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶 液(2分以上)) ⑤0.05%水溶液(本剤の 100倍希釈) (0.05%水溶液)	本品は下記の 温度(グルコ ン酸クロルヘキ シジンとして) に希釈し、水 溶液又はエタ ノール溶液とし て使用する。 効能・効果 用 法・用量 (使用例) ①手指・皮膚 の消毒 ②手術部位 (手術野)の皮 膚の消毒 ③皮膚の創傷 部位の消毒 ④医療用具の 消毒 ⑤手術室・病 室・家具・器 具・物品等の 消毒	
	セトリミド	なし														
創傷治癒促進成分	アラントイン	なし														

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
血行改善成分	酢酸トコフェロール ビタミンE:コペラ錠	微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。膜安定化作用を有し、血管壁の透過性や血管抵抗性を改善する。抗酸化作用を有し、過酸化脂質の生成を抑制する。内分泌系の賦活作用を有し、内分泌の失調を是正する。				0.1~5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)							末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の効能に対して、効果がないのに月余にわたって連続で使用すべきではない。		錠剤 通常、成人には1回1~2錠(酢酸トコフェロールとして、50~100mg)を、1日2~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、静脈血栓症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止